

食卓が

勉強机



吉村 幸代

七年前に他界した義父の遺品を整理した。あらかたの物は処分したり、人にあげたりして、

段ボール数箱分の書籍が残った。『戦火の記憶』『帝国陸軍の本質』『ヒルマの地獄戦』『死守命令』……大半が第二次世界大戦の戦記物である。

書棚は限られている。かと言って、箱に入れたまま物置にしまい込みたくもない。この書物の山をどうしたものか。考えあぐねた末に私は、自分の愛読書を大量処分することにした。居間の本棚には、義父の形見の本

を並べよう。そして、それを眺めながら暮らし、一冊ずつ読んでは故人を偲んでみたいと思う。

義父は旧日本陸軍軍医中佐として、ヒルマ(現ミャンマー)で七年の歳月を送った人である。厳格で曲がったことが大嫌い、知識欲旺盛なインテリだった。

早くに両親を亡くし、新潟大

は終わったと思っかね」と問いかけてきたのも、甥の鳴く夕暮れのことだった。

「戦争を知らない子どもたち」と歌われた世代の私に、南国の最前線での苦勞や思いや痛みが、慮りきれようはずはない。ただ、過酷な回顧話を聞いたとして、「それは大変でしたねえ」などと軽々しく言うのだけは嫌だと考えていた。

戦場の白菊

学医学部で苦学するうちに開戦。「どうせ戦争に駆り出されるなら出世の道を」という思いを、学費免除の魅力が後押しして、市ヶ谷の軍医学校に入った。陸軍の男、妾になったというわけさ」と苦笑していた。

義父はもともと無口なこともあって、戦争の体験談を口にすることは少なかったが、それでも夏が来ると時折、大戦の話題を出した。私に向かって「戦後

「戦争も終盤に近づくと、恐ろしい有様だった。ジャングルの中で、水溜りの泥水まで飲んで、よく生きて帰れたと思つよ」。義父の話は続いていた。

「そんなある日、わしは飛行機に乗るように言われた。天皇陛下が送って下さったという白菊を持って、窓のない飛行機でね、命がけで着いた先は野戦病院。病院と言っても悪臭の漂う

掘っ立て小屋で、中はまるで地獄絵巻。わしが『天皇陛下から賜った見舞いの花だ』と言つて、白い手袋をはめた手で菊の花をかざすと、ぐったりと横たわっていた兵隊たちが最終最後の力を振り絞って起き上がり、手を合わせて拝むんだよ。かさかさ乾いて枯れて、茶色に変色した白菊。ああ、どこから誰が採って来たのやら、素性も分からない花をだよ」。

私は涙を拭いた。「それが軍医のわしに与えられた最後の仕事だった。だが、医薬品も包帯も何から何まで無くなって、医者に一体何ができたと思っかね」。

今年二月に義母を見送って、新盆を迎えている。夫の両親の遺影に向かい、問うてみる。

「残された私たちは、戦争体験をどうやって語り継いでいったら良いのでしょうか」。

(寿台公民館長・主婦 川本 市)